

## 情報活用ボランティアによる教育効果

6 J-4

片山 滋友 青木 収 松田 郁夫  
日本工業大学

### 1. はじめに

最近、教育の中にボランティア活動を取り入れようとする様々な試みがなされている。今回実施した「情報活用ボランティア」はサイエンスボランティアに包含できる活動で、コンピュータを前に情報活用で困っている主に公的な組織や個人を対象にお手伝いしましょうというものである。

本活動が考えられたのは5年ほど前になる。情報工学科の設立に際し、本活動を全員に必修としてカリキュラムに組み込んだ。昨年、3年生全員（144名）を対象に実施したが予想以上に好評で、情報技術面は無論のこと人間的な面や創造性など、多くの点で非常に大きな教育効果が認められた。

### 2. 活動のねらい

本活動のねらいは、主に次の4つである。

#### (1) ボランティア精神の涵養

21世紀では、老人介護の問題や社会的弱者への対応は避けて通れない問題であり、“大学として何が出来るのか”という問からきている。

#### (2) 「個」の確立

情報ネットワーク社会においては、「個」の確立、すなわち、自分は何をやりたいのか、何が出来るのか、生きることを意味をきちんと把握することが非常に重要になってくる。「個」の確立には、P. F. ドラッカーが指摘しているように、ボランティアに学ぶのが最良の方法である。

Educational Evaluation of the Info-utilization Volunteer Program as a Part of University Curriculum

Shigetomo Katayama, Shu Aoki, Ikuo Matuda  
Nippon Institute of Technology, 〒345-8501

#### (3) コミュニケーション能力の養成

相手の要求を正確に把握し、それに対する的確な対応が出来るようにすることは、情報システム開発に携わる技術者にとって非常に重要な能力である。それを疑似体験を通して養成できる機会となる。

#### (4) これまで学んだ情報技術の実践と再チャレンジへの期待

この2年間に学んだ情報技術に関する知識を実践に移す機会になる。もし、期待に応えられなかったとき初めて本気で勉強を始めるのではないかという期待が持て、実際に社会に出るまでの1年半が充実したものになるのではと考えている。

### 3. 活動概要

#### (1) カリキュラムにおける位置付け

活動に出すタイミングは、ソフトからハードまで情報工学技術者として必要な基本的な事柄を一通り学んでいる点と、活動のねらいの(4)項の再チャレンジの余裕を考えて、3年前期に実施することにした。また、独立した科目名とするには多少抵抗があったので、ゼミVの中で行うことにした。なお、活動が終了し、最終報告が提出された時点で、2単位与えることにした。

#### (2) 活動先と活動期間

活動は二人一組で行うことを基本とした。活動先は、小・中学校、高等学校、教育センター、福祉施設、学内の研究室や各センターなどである。活動期間は前期（4月から8月）とし、毎週木曜日1日（5時間程度）を充て、履修状況によっては他の日や夏休みに集中して行っても良いようにした。

#### (3) 事務処理上の諸問題

事務処理上の問題には、募集のタイミングと方

法、担当者との連絡方法、トラブル処理、学生との連絡方法、派遣先の決定方法、事故発生時の保険、活動に関するオリエンテーション（特に心構え）、ゼミ担当教員の役割などがある。

#### (4) 活動内容

学生は活動先が決まると、まず相手方の担当者との活動内容について交渉を始める。活動内容は小・中学校と福祉施設、大学内で大きく異なる。

小・中学校では、教員に対するコンピュータの操作指導やコンピュータを利用した授業の支援・準備、課外活動での指導などが多い。

福祉施設では、障害者用のインタフェース装置の製作が多い。

学内では、各研究室のホームページの作成やネットワークの管理、卒研生などへのプログラミング等のアドバイス、マニュアルの作成、就職情報検索システムの作成などである。

#### 4. 活動終了後のアンケート結果

活動終了後、全員に記名式でアンケートをとった。その結果をいくつか示すと、

① 活動先の要求にどの程度応えることができたか？

- ・十分出来た。(10.6%)
- ・まあまあ出来た。(45.8%)
- ・力不足を感じた。(41.5%)
- ・ほとんど応えられなかった。(1.4%)

力不足を感じた者は、活動先が学内の場合に多く見られた。

② 種々の課題・問題にぶつかったときの解決方法は？

最も多かったのは、友人(59%)、次に自分で調査・解決した(56%)、情報工学科の教員(28%)、活動先の担当者(23%)、その他の順であった。

③ 自分として得るものがあったか？

- ・非常に大きな収穫があった。(12%)
- ・かなり収穫があった。(49.3%)

・いくらか収穫があった。(33.8%)

本活動を通して95%以上の者は何らかの収穫を得たようである。

④ 情報技術面で勉強になったか？

- ・非常に勉強になった。(5.6%)
- ・かなり勉強になった。(24.6%)
- ・いくらか勉強になった。(51.4%)

以上のように81.7%の者が情報技術面で勉強になったと答えている。

⑤ コミュニケーション技術の面で勉強になったか？

この問に対し89.4%の者が勉強になったと答えている。

⑥ 人間的に成長したと思うか？

この問に対し86.6%の者が成長したと答えている。

⑦ 今後の学生生活(勉学面で)について考え方が変わったか？

- ・非常に勉学意欲がわいてきた。(2.8%)
- ・かなり勉学意欲がわいてきた。(25.5%)
- ・いくらか勉学意欲がわいてきた。(43.3%)
- ・前と変わらない(28.4%)

勉学の意欲がわいてきた者はなんと71.6%にもものぼる。

⑧ 今後何らかの形でボランティア活動を続けたいか？

この問に対し、積極的に(5%)、出来れば(73%)を合わせ78%の者が続けたいと答えている。

#### 5. おわりに

アンケート結果からも分かるように予想以上の成果が得られた。人から頼りにされたり、人に教えたり、人の手助けをする立場に立たせることが非常に良い教育方法であることを確認できた。

情報教育はあれこれとカリキュラム内容をいじるより、多少大変ではあるが、本活動のようなことを盛り込む方がはるかに教育効果が大きいと思われる。また、副次的に地域や学内の情報化の推進にも大きく貢献することになる。